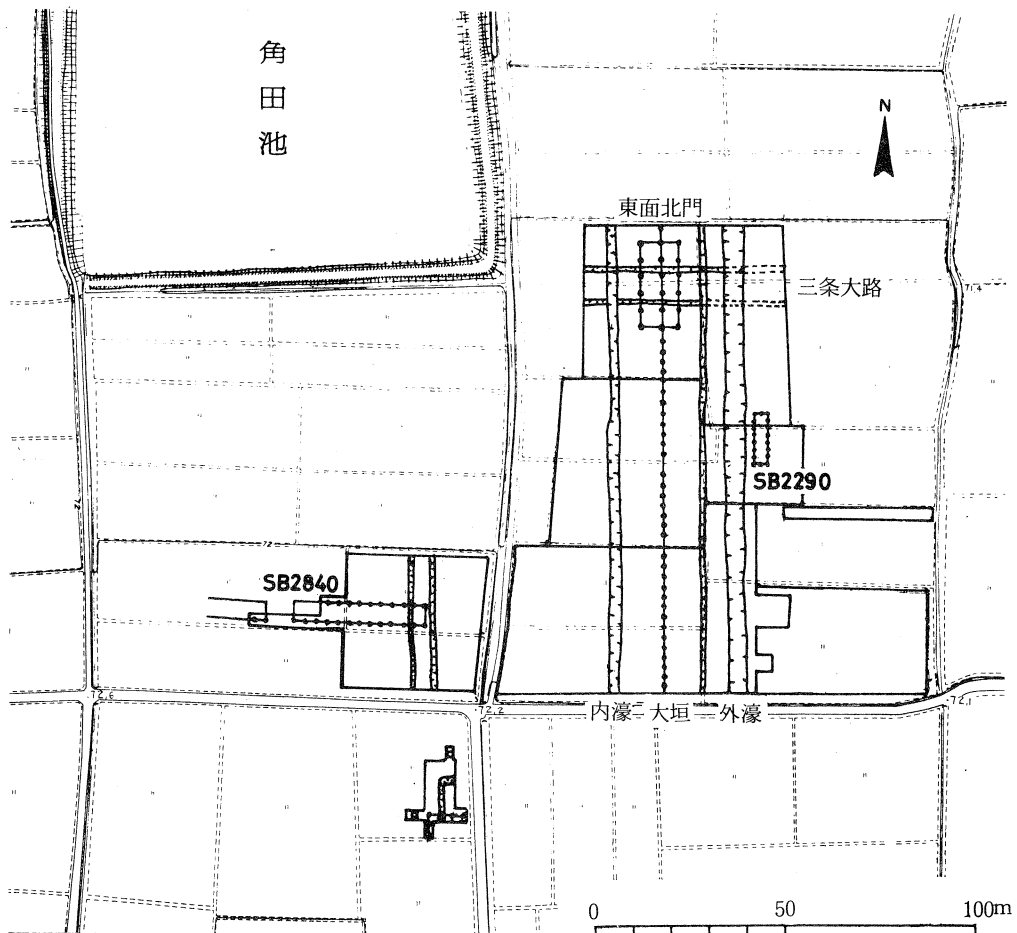


藤原宮東面大垣の調査（第29次）

（昭和55年4月～昭和56年3月）

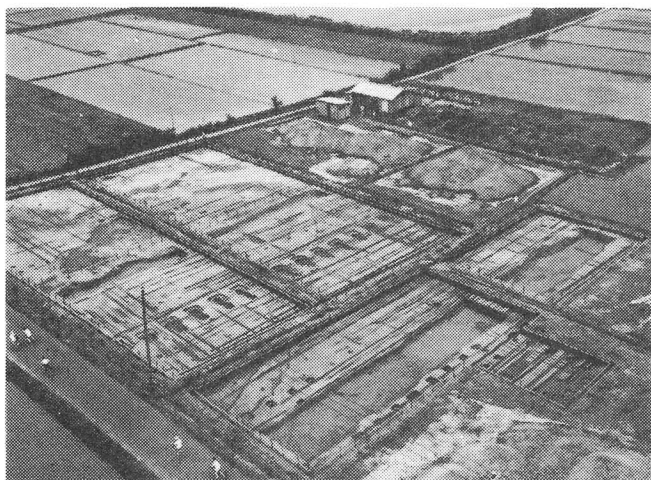
この調査は、昭和53年度の第24次調査、昭和54年度の第27次調査に続いて東面大垣北半部において行った調査である。調査地は、宮大垣北東隅から南へ約260 mの場所で、第24次調査地に南接する。調査範囲は南北約48m、東西約68 mである。第24・27次調査では、東面大垣とそれに開く宮城門（東面北門）、内濠、外濠や若干の建物、宮に先行する三条大路等を検出しているのので、この近辺の様相がかなり判明してきた（位置図参照）。今回の調査では、宮東限の



藤原宮東面北門周辺調査地位置図（1：2000）

諸施設をさらに広範囲に明らかにすると共に、これまで必ずしも充分解明できていない大垣西方地域の状況を明らかにすることを目的とした。

調査地の層序は上から順に、耕土、床土、茶褐色土となり、茶褐色土層の上面で遺構を検出した。



調査地全景（南東から）

検出した遺構の時期は、藤原宮期、藤原宮期以前、その他に大別されるので、その区分に従って説明する。

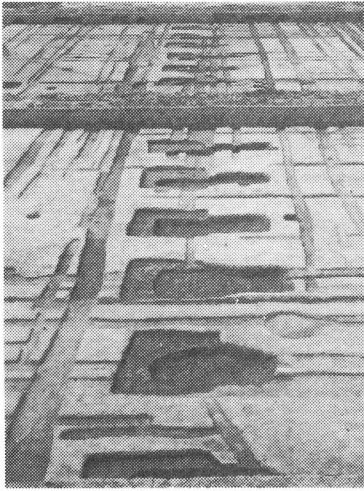
藤原宮期の遺構 東面大垣 SA 175，外濠 SD 170，内濠 SD 2300，南北溝 SD 2295，土壇 SK 2801・2803・2807 がある。

東面大垣 SA 175 は南北方向の掘立柱塀で、36mにわたり13間分を検出した。掘形の規模は前2回の調査で検出したものと大差ない。いずれも東に柱が抜き取られている。柱間寸法は2.66 m（9 尺）等間で、従来の知見と一致する。

内濠 SD 2300 は、大垣の西方約12mに位置する幅 2.5 ～ 3 m，深さ約 0.7 m の素掘り溝で、総長36mにわたって検出した。濠の堆積土は3層に大別され、下層の第2・3層からは木簡、木製品、瓦、土器が出土した。木簡、土器とも第2層に多い。第1層は、濠廃絶時に埋めたと考えられる土層であり、次に述べる外濠の第1層も同じである。

外濠 SD 170 は、大垣の東方約20mに位置する幅 5.5 ～ 6.0 m，深さ 1.2 m の素掘りの溝で、総長約47mにわたって検出した。堆積土は4層に大別できる。最下層の第4層は無遺物層で、第1・2層からの出土遺物も少ないが、第3層からは瓦、土器、木製品、木簡等が出土した。

南北溝 SD 2295 は、大垣 SA 175 の東約12mにあり、大半は畦畔下になる。幅 0.6 m，深さ 0.3 m の規模で、断面形はV字形を呈する。前2回の調査で検



東面大垣SA 175（南から）

出した溝と一連の溝で、宮の四周を巡っているものと考えられる。

土壌SK 2801は内濠SD 2300の東岸にある。東西3.6 m、南北1.1 mの不整形をした土壌で、埋土から瓦、土器、木簡が出土した。SK 2803は、内濠SD 2300の西岸に接して、東西12 m、南北20 mの範囲に広がる複数の不整形をした土壌である。深さは0.2 m前後であるが、部分的に落ち込む箇所があり、そこから瓦、土器、土馬が出土した。土壌の上面には炭化物を含む層

が全面にあり、その層は内濠上も覆っているので、内濠廃絶時に、濠と土壌が同時に埋められたとみられる。土壌SK 2807はSK 2803の南西にある。直径が0.6 mの円形を呈し、中から土師器の完形の甕が出土した。

藤原宮期以前の遺構 藤原宮期以前の遺構はさらに7世紀代と古墳時代前期の遺構に区分できる。

7世紀代の遺構は主に外濠周辺で検出したもので、掘立柱建物3、掘立柱塀2がある。なお、調査区南東部に東接する地域を現在調査中（第32次調査）があるので、今調査区東辺の遺構については、その成果を参考にした。

東西棟建物SB 2780は、外濠の東にあり、桁行3間、梁行2間の規模である。建物SB 2770・2772は外濠の掘削によって掘形の一部を失っている。SB 2770は南北棟で梁行2間、桁行は3間以上となる。SB 2772は東西棟と考えられ、梁行2間、桁行2間以上となる。

SA 2773は外濠の東岸にある5間の南北塀で、北端ではSB 2772に重複する。北から2・3番目の掘形には柱根が残る。柱間寸法は2.0～2.4 mあり、一定していない。南北塀SA 2785は外濠の西岸にあり、3間分を検出したが、南へ延びる可能性もある。掘形には柱痕跡が残り、柱間寸法は2.1 m等間である。

これらの遺構の時期決定については決め手を欠くが、SB 2770・2772は外濠との重複関係から、外濠掘削時より古い建物であることがわかる。東接する第

32次調査地では、藤原宮期より古い7世紀代の遺構が検出され始めており、今調査で検出した外濠周辺の遺構は7世紀の遺跡の一部とも考えられる。なお、これらの遺構の時期、性格については、第32次調査終了後に再検討したい。

古墳時代の遺構には溝SD 2784・2321・2777・土壙SK 2771・2811・2815 などがある。溝SD 2784は調査区の南東から北西に走る素掘り溝で、北西端は内濠付近で消滅する。幅は平均3 m、深さは0.6～0.9 mある。堆積土は4層あり、上層の第1・2層から庄内・布留式土器が出土した。斜行溝SD 2321は、第24次調査区から延びている溝の末端部である。溝SD 2777は重複関係からみて、斜行溝SD 2784より新しく、内濠・外濠・大垣・SB 2780よりも古い。埋土の土質が類似していることから古墳時代前期の遺構と判断した。

土壙SK 2771は調査区南東隅にあり、西は外濠に切られているので全容は不明である。深さは約35 cmあり、中から庄内式土器が出土した。土壙SK 2811は、調査区の南西にある溝状の土壙である。幅は約3 m、深さは0.4 mあり、8 m分を検出した。堆積土は2層に大別でき、上層から弥生時代後期末の土器と庄内・布留式土器が出土した。この遺構の性格は不明であるが、西隣にある土壙SK 2815 もSK 2811と形態が類似し、相関連するものとなる可能性が強い。

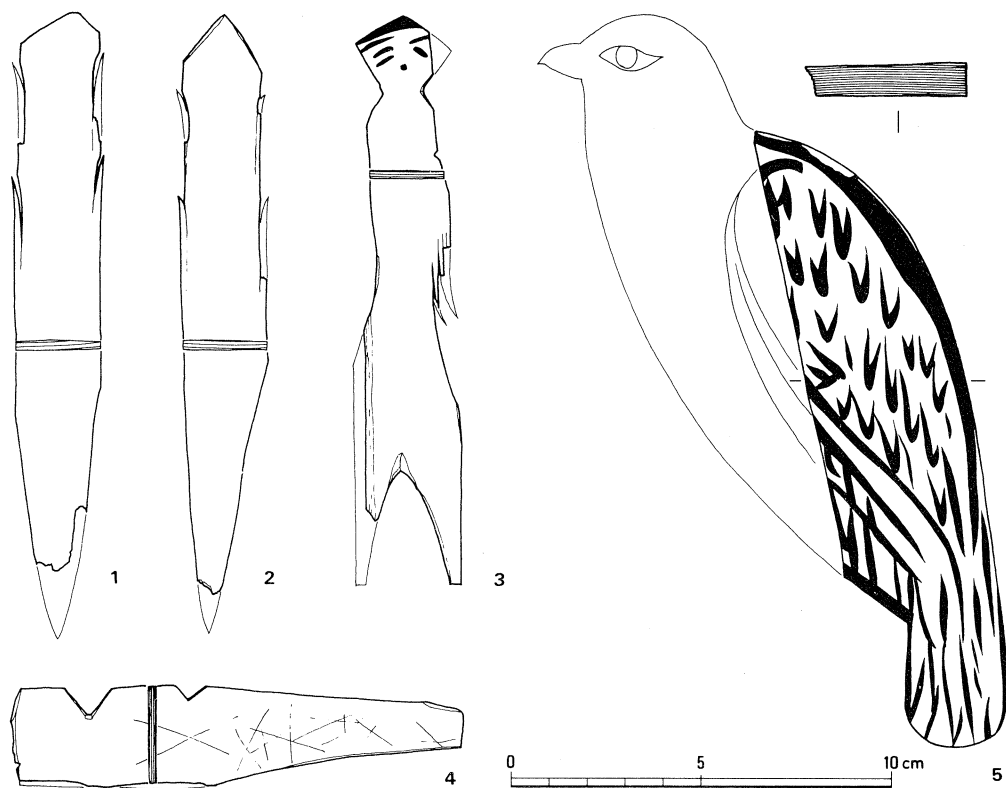
その他の遺構 以上に述べた遺構のほかに、7世紀から9世紀の間に入ると推定できる遺構がある。しかし、他の遺構との重複関係や出土遺物がないために、その時期を限定できないので、ここで一括して説明する。

大垣と外濠の間にある東西棟建物SB 2790は2間×2間の規模と推定され、柱掘形は小さい。南北塀SA 2800は大垣の西約4.5 mにある。6間分を検出したが、南へは延びない。南端と南から4番目の掘形には柱根が残っていたが、柱間寸法は2.5～3.3 mと不揃いである。SA 2810は調査区の南端にある東西5間の塀で、掘形の全てに柱痕跡が残っている。柱間寸法は中央間が2.3 m、ほかは1.9 mである。SA 2813はSA 2810の西にあり、東西塀の一部と思われる。SA 2816はSA 2810の北にある3間の東西塀で、方位は東で北に偏する。

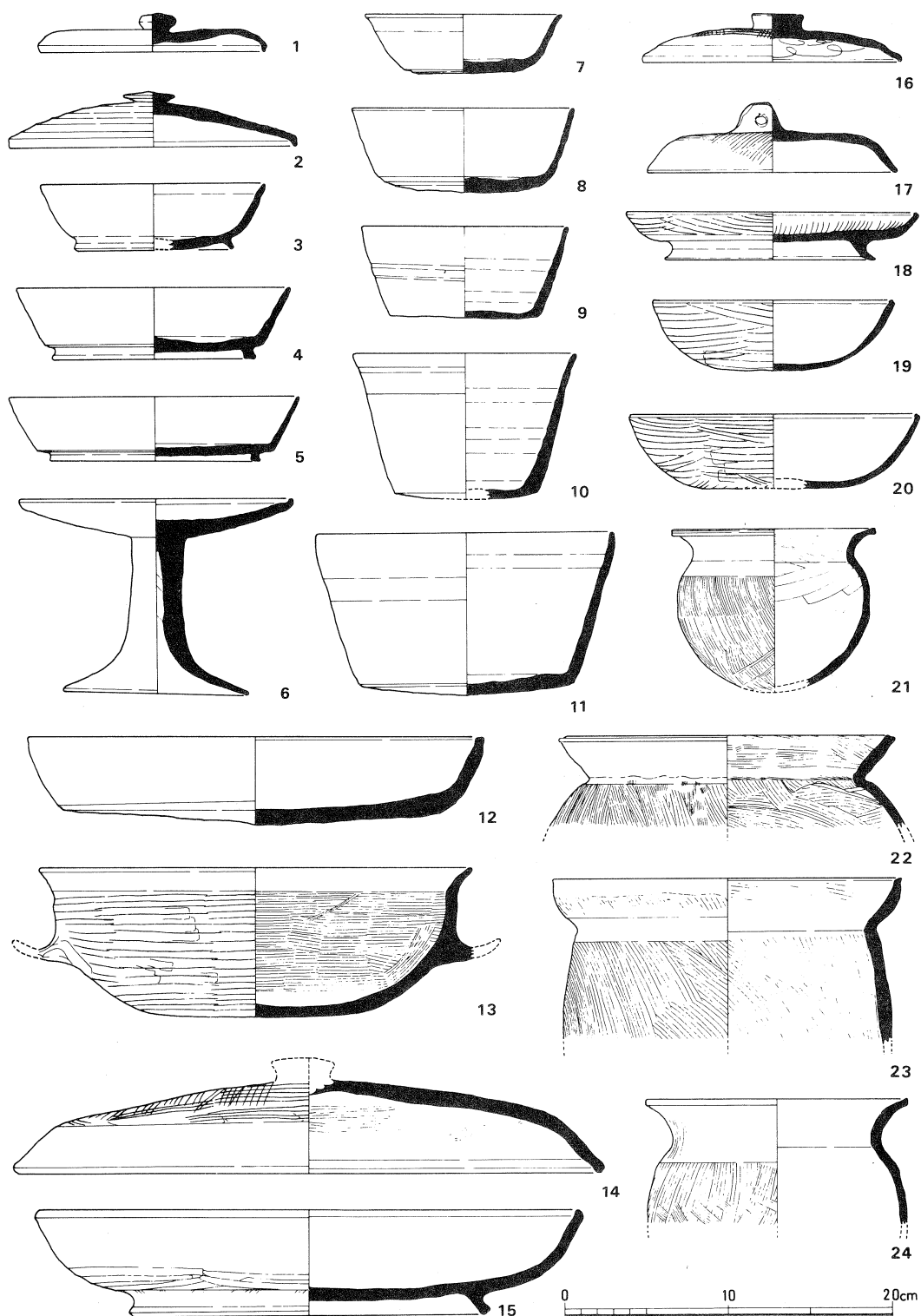
出土遺物 木簡、木製品、瓦、土器、金属製品などがある。時期的には弥生時代から中世に至るものがあるが、ここでは藤原宮期の遺物について述べる。

木簡は外濠1439点，内濠69点，土壙（SK 2801）43点，総計1551点が出土した。その内容を全般的にみると，年紀のあるものでは大宝以前7点，大宝以後6点あり，貢進物付札では評表記のもの17点，郡表記のもの14点であるので，半数以上は大宝以前のものということになる。意味のとれる木簡の中では文書様木簡が多く，このうち官司名を記すものには，中務省，民部省，皇太妃宮職などのほか，大膳職，大炊寮，内膳司，造酒司，園池司等の宮内省被管官司が多い。貢進物付札は19カ国にわたっており，伊勢，若狭が多いが，大倭，山背，川内など畿内の国も目立つ。

個々の木簡の内容では，外濠から出土した「皇太妃宮職」名を記したものが注目される。また，内濠からは「皇太妃宮舎人」と記したものも出土している。当時，文武天皇の母の阿閉皇女が皇太妃と称されており，後に即位して元明天皇となる。皇太妃宮職は同皇女のために設置された官司であろう。このほかに「多治比山部門」と記した木簡や長楕円形の小板に仏像を墨画したものがある。



出土木製品実測図



出土土器実測図（内濠 2・4・5・9・11～14・24，他は外濠）

なお、木簡の詳細については『飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報』(六) (昭和56年)を参照されたい。

木製品は、外濠から削り掛け(1・2)、人形(3)、馬形(4)などの祭祀具のほか、曲物容器や杓子が出土している。内濠からは、鳥の側面形をかたどった板の片面に羽毛を墨線で表現したもの(5)が出土している。

瓦には、軒瓦、面戸瓦、熨斗瓦、丸瓦、平瓦がある。軒瓦の出土点数は、第24・27次調査に比較して少なく、軒丸瓦は7型式16点、軒平瓦は8型式22点である。そのうち、内濠と土壌SK 2803からの出土が¾を占め、外濠からの出土は僅か4点を数えるにすぎない。外濠の調査面積に比べて、軒瓦出土点数が激減している点は注目すべきであろう。すなわち前2回の調査における外濠の瓦出土状況は、藤原宮廃絶時に東面北門および南北棟建物SB 2290所用瓦のうち、再使用できない瓦を外濠に一括投棄した事情を反映していると考えられる。

土器は外濠と内濠から主に出土した。内濠では第24・27次調査において多量の土器が出土しているが、今回の出土量は少なく、前2回の調査時の各々⅓にも満たない。内濠出土土器については、その一部を紹介している(概報9)。今回出土した土師器のなかには、外面を口縁端部まで削るもの(19・20)のほか、形態・手法の上でも従来知られている藤原宮期の土器とは異なったものが多く出土しており、宮使用土器の実態解明に新たな手懸りを得た。

まとめ 今回の調査では、前2回の調査と同様に東面大垣・外濠・内濠を検出したほか、外濠の東方で若干の建物遺構を発見した。一方、大垣西方の宮内では藤原宮期の顕著な遺構はなく、後述の第30次調査で検出した東西棟建物SB 2840との間約60mほどは空閑地となっていたことが考えられる。

藤原宮の東面する門の門号については、第27次調査で外濠から「少子部門」「建部門」と記した木簡が出土している(概報10)。今回は外濠から「多治比山部門」と記した木簡が出土したが、平安宮の例からみると、多治比門は北面し、山部門は東面する門とみられるので、先の少子部門、建部門と合せて藤原宮東面の3門号が揃うという画期的成果を得た。3門号がそれぞれ北・中・南のどの門に該当するかは今後の検討課題である。